

おだわらライブリー通信 第五号

小田原の文化資源を発掘する◆小田原市民会館のストーリーを紡ぐ

小田原の“失われた劇場” 「桐座」とは

おだわらライブリー通信第五号では、古くは北条氏の時代から、大正12年(1923)の関東大震災で倒壊するまで小田原に存在した芝居小屋「桐座」について、小田原ガイド協会副会長の湯山尊明さんにお話を伺いました。桐座で舞われていた「幸若舞」の成り立ちから、土地の権力者との結び付き、そこで働いていた方たちの奮闘まで、時代を一気に駆け抜けるお話になりました。

今もその技が伝承されることに、感激をしています 湯山尊明さん(小田原ガイド協会副会長)



桐座について調べていくと「幸若舞」が面白くなりまして、小田原桐座について、幸若舞の話を中心に進めて参ります。幸若舞とは何か、劇場で行われる「舞」や「踊り」の原点は何か、ということ。簡単に言えば、室町時代に流行した語りを伴う「曲舞」の一種で、能や歌舞伎の原型といわれています。およそ700年程の伝統を持ち、中世から近世にかけて、能と並んで武家、武将に愛好された芸能です。

幸若舞は、「語り」、物語性が非常に強い芸能です。武士の華やかにして、かつ悲しい物語を主題にしたものが多いです。たぶん皆さんも知っていると思いますが、『敦盛』。織田信長が桶狭間で今川氏を奇襲する際、『敦盛』を舞い踊って攻撃に出たという有名な場面があります。『敦盛』の主役は、源平合戦の一の谷の戦いで敗れた平敦盛。このときに源氏方の熊谷次郎直実が首を掻き落として、人生の無常を感じ、世を捨てて憐む、という物語です。武家の人たちの心に突き刺さるような物語性を持つています。この辺でいうと曾我物語などが、非常に近い話になります。

幸若舞の古典的な流派として、福岡県みやま市瀬高町の大江に伝わる「大頭流」の幸若舞があります。これは二人舞から三人舞になったという、革新的な幸若舞の一派です。是に対して幸若流というのがありますが、これが桐座、小田原桐座に関係してくるようになります。幸若舞のルーツですが、元々は「曲舞」もしくは「舞舞」と呼ばれていましたが、曲舞の有力流派であるところの幸若家が台頭してきました。幸若舞、と呼ばれるようになります。当時のポルトガルのキリスト教伝道師が使用した「日葡辞書」によりまずと、「クセマイ」とちゃんと書いてあり、当時の解説では「ある物語を語りたり舞ったりして生計を立てる者/音曲をつけて作られたある種の物語」とあり

ります。また「日本の演劇。普通に演じられるよりも節をつけて長く引き伸ばす場面・くだり」とあります。このように、当時のポルトガル人は理解していました。曲舞の記録で一番古いものは、『看聞御記』応永23年(1416)3月25日の日記の記述に「抑手ク、ツ参、猿楽仕。小童一人天骨者也。リウゴヲ舞ス。又獅子ヲ舞、又クセ舞ヲ舞。」とあります。傀儡(くぐつ)、人形芝居のこと)や猿楽などのなかに童子がひとり「天骨者也」、これは天才的な才能の子どもがいた。彼らの様々な芸の中に曲舞もあった、ということ。『風姿花伝』にも、「舞、白拍子、又は物狂などの女がかり」とありまして、憑き物の依り代となる巫女を含める女性の職業として認知されていました。

「白拍子」と「曲舞」は同じ様なものなのですが、なぜ「曲舞」「幸若舞」というものが出てきたか。「舞」は武家社会に入っていく「白拍子」は入ってこられなかった。元々はどちらも同じように語られていたのです。それが、いつごろから栄えるようになったのか、ということ。『峯相記』文保2年(1318)の記述に「養寺大堂建立縁起の法会」というものがありまして、「白拍子」が抜けて「曲舞」が出てくる。一方、永仁5年(1297)『普通唱導集』には「白拍子」がまだ記されている。まだ完璧には分かれていないんです。曲舞と白拍子が分かれたのがこの間であると考えれば、13世紀の半ばまでは「白拍子」が全盛で、そのあと、「曲舞」が隆盛を迎える、ということになります。武家の社会も、だんだん力強くなってきた、ということもあると思います。

幸若舞の二大流派と呼ばれるものがあります。ひとつは「幸若流」。江戸時代に書かれた由緒書きでは、南北朝時代に活躍した武将の桃井氏の末裔を称する、桃井幸若丸が延暦寺の稚児として舞を舞ったところ、時の天皇の寵愛を得た、としています。もうひとつが「大頭流」。『御湯殿上日記』永正13年(1516)の記事から見られる流派で、『言継卿記』では京の者としています。二人が基本であった舞を、三人舞にしたという新しい形を作った流派です。このようにして、

だんだん幸若舞が成立してきた経緯が分かります。幸若舞と武家の関係について、曲舞を生業とする人たちがだんだん武家社会の中で重宝されていった。ひとつは、北条氏との結びつきがあります。古い文献の中には、足柄下郡古新宿町の天十郎太夫という人が出てきまして、北条氏二代目氏綱から謁見を与えられた、とあります。北条家に何かがあると、舞を舞うという役目を持たされます。ただ単に舞うだけでなく、北条氏の家の組織の中に取り込まれてきた、ということが分かります。

自分にとって市民会館の思い出という、城内小学校6年の時、市川昆監督の映画「東京オリンピック」を市民会館で見た記憶がなぜ鮮明に残っていますか、なんといっても、私が20代の時、劇団風の子に所属してまして、学校公演や子供劇場を回っていましたが、市民会館でやった「ぼくらのロングマーチ」という作品は、小田原に住んでいる自分が、地元で親戚、知人に御披露目できたという、うれしさを思い出させてくれます。

■市民会館の記憶と市民の投稿から

またこの作品は、昭和52年(1977)の文化庁主催芸術祭参加作品でありまして、演出の関矢幸雄氏が芸術祭優秀賞を受賞した作品でもあり、児童演劇の底力を見せつけた作品でもあり、二重の意味でも印象に残っている作品でもありました。

市民会館は、ただの建物ではなく、市民それぞれにとって、思い出の詰まっている玉手箱のようなものではないでしょうか。

(北村敏弘さん)

小田原子ども劇場第10回例会 (芸術祭出品)

ぼくらのロングマーチ

11月11日 開演日時
小田原市民会館大ホール

そして、足柄下郡荻窪村の大橋治部左衛門嘉義が、だんだん北条氏の組織の中に入って、いろいろな舞をしながら、家格を高めていくことになるわけです。

同時代には、信長・秀吉・家康も「幸若」を寵愛していました。信長の今川氏奇襲のシーンのように、「敦盛」というものが当時の戦国武将の琴線に触れるような、詩想や物語性を持っていった、ということが分かります。

『毛利家本』では、毛利輝元が、家臣を越前の幸若家に、幸若流の舞を習得してこい、と二人の家臣をわざわざ派遣しています。越前の幸若流が、毛利家の領地でも流行っている。戦国武将の毛利家も、このように舞を習得させていたということが面白いですね。

この辺から、小田原、そして桐座のほうに入っていきます。小田原桐座の「引き札」があります。引き札というのは、いまでいう宣伝パンフレットです。桐尾上と書いてあり、これが座主、興行主ということですよ。

『新編相模国風土記稿』には、「音曲舞太夫大橋四郎次井(ならびに)桐尾上」と、かなり詳しく書いてあります。『新編相模国風土記稿』



桐座興行の引き札(荒河純さん提供)
桐座興行の引き札(荒河純さん提供)

は、小田原の歴史の話をする方々が参考にされる本ですが、間違えているところもあります。他の資料をつき合わせて調べていかないと正しい答えが出てこないかもしれません。ここには『越前国舞々幸若小八郎門弟なり』とあります。家伝によれば「其祖は筑前国大宰府の住人桑原式部嘉光と称す」。筑前国、いまの福岡県ですね。ここに先ほどの、福岡県瀬高町の大江に舞われる大頭流が繋がってきます。連綿と続いてきたものが、今でも大江に伝承される芸能として続いているということに、私は感激します。

『嘉光の第十郎光政、其の子五郎左衛門嘉高、大永三年(1523)関東に下向し始めて相州に住す』とあり、北条氏の領内に移り住みました。『嘉高兼て幸若に所縁ありて其技を相傳す』とありますので、この人は明らかに幸若の技をもっている。『依て北條氏の舞太夫となれり』とありますのは、先ほどもお話しした通り舞をもつて北条氏に仕えた、ということです。『天文九年(1540)左京大夫氏綱、鶴岡八幡宮造営の時、社頭に法楽舞を勤む』。『代目氏綱の治世、鶴岡八幡宮の造営の際に法楽舞を舞った、という記録です。法楽舞とは、神仏に喜びを持つてもらうために舞う、奉納の舞です。この記録の中では、北条氏の「虎朱印」を貰って、かなり家格の高い扱いを受けていたということが伺えます。たびたび北条氏的重要請を受けては法楽舞などを奉納し、褒美を受けていたことが記されています。

嘉高の子、嘉政の時代に、大橋氏に改姓しています。後述しますが、由緒書を書いた大橋林当(りんどう)まで、ずっと名前が受け継がれています。小田原の松原明神でも奉納の舞を舞っているようです。嘉政の子、嘉義は、北条氏政から名前の一字をもらって「政義」と名前を改めるなど、ずいぶん高い位をもらっています。その戦国大名から名前の一字をもらうなんて、普通では考えられないことです。家格が高く、芸が特出していた、ということが伺われます。

政義は、鎌倉の玉縄城主の北条氏勝の被官となると書かれています。北条氏勝は、天正18年(1590)の小田原北条攻めの際には箱根の山中城に援軍として詰めていました。また、北条氏の武州鉢形城(現在の埼玉県寄

居町)でも舞を奉納しています。城主は北条氏邦、非常に文武に優れた人であったとされています。それから大橋家の当主が、様々な場所でも舞を舞った、ということが記されています。

小田原桐座は、女舞太夫として有名になります。『嘉明(大橋政義の子)多病なるを以て、族子銀太夫政氏を養て家業を襲しめ、娘くらを妻せ、亦家職を相傳し、女舞太夫となす』とあります。つまり養子をとって娘のくらを妻に聚らせ幸若舞を伝えていく、ここから桐座の女舞太夫が始まります。『夫婦其技を相續して、夫は音曲舞太夫、妻は音曲女舞太夫』というふうになり、夫婦で舞を伝えていく、ということになります。このあたりから江戸桐座の話も入ってきます。『正徳六年以後は、大橋四郎次桐尾上を通称として今に至る』とあります。これ以降小田原桐座については、「桐尾上」という名前がよく出てきます。この時代から通称として名乗るようになり今に至る。冷泉家から職業のことを尋ねられたときに、『日相州足柄下郡小田原領荻窪村寺町之住』、小田原桐座というのは正に寺町です。この土地に住んで、この技を伝えていく、と答えています。

『女舞太夫桐尾上、年十六歳、髪すべからじ冠も瓔珞(ようらく)、小太刀鐔木瓜、鞆黒塗、木瓜散し金蒔絵、』と、綺麗な姿が想像できます。水干を着て、単なる官能的な踊りではなく、武家の装束をしています。『小田原城主の嘉儀ある毎に』とあるので、お祝い事があるたびに音曲舞を興行していました。

小田原桐座がどのくらいの規模であったか。『宅地の後に八間半二十五間の舞台築屋棧敷等あり、興行の日は、桐尾上烏帽子水干にて舞台に出床机に踞し、相傳の謡歌を謡ふ』とあります。烏帽子水干の姿で床机に座り、相傳の歌を謡ったわけです。『傍に頒白の老叟素襖侍烏帽子にて太鼓を打是に和す』とあります。舞は水干、鼓は素襖と服装にも違いがありました。舞台で歌舞伎狂言を興行することもあり、そのときには監使が来て、必ず尾上の舞をやったあとに狂言をする、と書かれています。『歌舞伎興行の時は、檜上に紺地に桐の紋及御城附女舞太夫桐尾上と、染出せし幕を引けり』とあります。

また、『江戸浅草田原町村八太夫配下』として神事舞太夫大橋六太夫という人物の名前が見られます。これは「祖銀太夫政氏は音曲舞太夫なりしが、元禄七年家職を婿及女に譲りて別家となり」とありまして、小田原桐座とは別の系統で活動していました。

■市民会館の記憶と市民の投稿から



● 2月19日

読売日本交響楽団(指揮・大友直人)

● 3月19日

NHK交響楽団(指揮・スウイトナー)

● 4月19日

新日本フィルハーモニー交響楽団

昭和63年(1988)に小田原市民会館大ホールにて行われた、実現不可能と言われたクラシック交響楽団による3ヶ月連続コンサートです。当時の「小田原市民ホール」早期建設「キャンペーン」を含めて行われました。(杉崎宗雲さん)



次に、私も非常に参考にさせていただいた、石井富之助先生の論文で、小田原史談会の報告書の記載です。面白いのは、「声色は、小田原までは通用し」という古い川柳が引用されています。小田原桐座は「出世舞台」といわれ、上方に上るときも歌舞伎をやつて、上方から江戸に下るときも興行しました。この舞台に立つのは名優だけではなく、修行をする若手たちも小田原桐座に出ました。役者の成長を促すため、舞台を踏む、という経験になったわけですね。石井先生の川柳を挙げたのも、そこなんです。「小田原までは通用し」というのは、江戸から小田原までは社会的な通念が共有のものとして通用していたんですね。寛文6年にはすでに劇場として存在していたこと、これは関東の劇場の中でも最も古い部類に入る、ということをお先生はおつ

小田原市民会館と歌舞伎



小田原市民会館と歌舞伎の繋がりを聞いた時、「え！市民会館と歌舞伎が」と思いました。

小田原市民会館は、音楽、演劇、美術、映画、写真、古典芸能、文芸といった市民の文化活動を大きく支え貢献してきています。なかでも「劇団こゆるぎ座」が小田原の文化活動に深くかかわっていたことは知っておりましたが、歌舞伎とのかわりは五十嵐写真館の湯山尊明さんの小田原桐座の話から歌舞伎とのかわりがあったことを知りました。

江戸時代には小田原には桐座という芝居小屋があったようです、このことから考えますと、市民会館は、昭和37年(1962)当時としては画期的といわれる回り舞台の装置を持った市民会館として開館し評判になった、これは明らかに歌舞伎の上演を意識した舞台装置だと思われま

さらに、市川団十郎が咳と痰の病いのためにせりふが言えず困っていた時に小田原の外郎(ういろう)を服用して病がなおり舞台に復帰できた、という話も聞きました、市川団十郎の歌舞伎十八番の一つに「外郎売」があります、歌舞伎とのつながりがうかがえます。桐座についてみてみますと、もとをたどると

しゃつています。座主は桐屋上という女舞太夫。寛文6年(1666)に江戸木挽町で桐座の櫓を上げて興行したこと、これが関東の女歌舞伎の始といふべきものとして注目に値する、と書いています。

「劇場桐座由緒書」、大橋林当(りんとう)の著です。幕末の頃には、小田原桐座が上手くいかなかった、横浜に行くのです。その当時、横浜には外国人の居留地ができて、人がどんどん集まってきました。小田原ではなく横浜に、芸術文化を見せる場として桐座を建てます。一回目は失敗するんですね。そのような話があります。この辺は、小田原史談会の荒河純さんの論文を読んでいただけだと思います。

小田原北条氏の時代、大永3年(1523)にさかのぼります。

桐座は、舞太夫職に任じられた大橋家の家系を継ぐ女舞太夫の桐屋上が江戸時代前期に創設したといわれています、小田原の桐屋上は小田原北条氏時代から舞太夫職を務めた古流舞の大橋家から江戸時代に分家したといわれています。

一方、女舞太夫の桐大内蔵、桐長桐が江戸の舞台で興行して大当たりとなった、この一座の名が「桐座」という看板やぐらであったところからその名が全国に知れわたったようです。以来、小田原にとって由緒のある桐座は、明治の初めまで、狂言、音曲舞、歌舞伎などの興行が続けられました。

他方、歌舞伎座との関係が深かった小田原市長の鈴木十郎氏が小田原市民会館の開館記念事業に松竹大歌舞伎特別公演を企画実施したことも小田原市民会館と歌舞伎との深い絆を感じずにはいられません。

さらに平成26年(2015)には、16年ぶりに松竹大歌舞伎が小田原市民会館で上演された、この公演は中村翫雀改め四代目中村鷹治郎襲名披露「双蝶々曲輪日記玩辞楼十二曲内引窓」。

小田原市民会館は江戸時代から歌舞伎との深い関係を築いていたことを知る事ができます。(ライブリー隊員・高塩英芳)



『歌舞伎年代記』より、桐家興行の引き札

たら、もつと先まで行つていたので驚いた、と。それくらい行動圏、興行権があったんですね。それで大失敗して、持ち逃げされた、払つてくれなかったり、そういうこともあったようですね。

面白いのは明治24年(1891)3月、「川上音二郎一座」が来ているんですね。「オツペケペー節」で有名な川上音二郎。彼が小田原に来てオツペケペーをやるんですが、威勢のいいお兄ちゃんたちと大喧嘩するんですね。音二郎は無罪放免で横浜に帰りますが、小田原のお兄ちゃんたちは警官からきついお灸を据えられた、というエピソードがあります。

最終的には、小田原桐座は、大正12年の関東大震災で倒れてしまっています。それ以降は、私たちの街には桐座は存在しません。それにもなつて小田原の桐屋上という女舞は、一時途絶えます。どういふものか、私も見たことがありません。見ている方は、昔日の想いがある方でしょうか、いまでは見たことがない方でご存命の方はいらつしやらないと思います。

最後に謝辞として、桐座を研究されている小田原史談会の荒河純さんにお話をいろいろ伺いました。ありがとうございました。

湯山尊明さん 参考文献 「小田原桐座について 幸若舞の話を中心に」

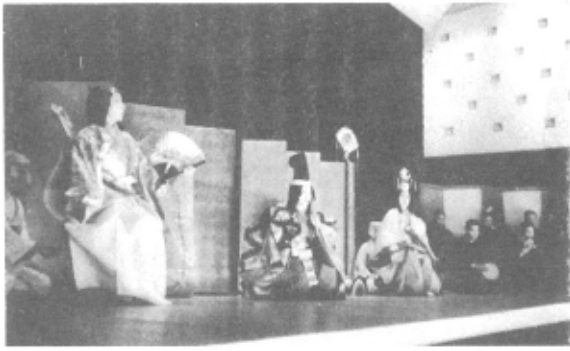
- ・「劇場桐座由緒書」 大橋林当
- ・『桐座記録』 中川金太郎・中川初太郎
- ・小田原桐座資料 石井富之助
- ・『小田原桐座の発見』 木村錦花
- ・「小田原桐座の開港地横浜進出について」 荒河純
- ・「筑後大江幸若舞について:系図・名称をめぐって」 松田修
- ・『おだわらの歴史』 小田原図書館編
- ・『樹陰読書』(ネットサイト) 水沢優雅

昭和の桐座復興について

様々な資料から

『特別展 小田原と歌舞伎展—元小田原市長 鈴木十郎コレクションを中心に—』パンフレットより
昭和三十一年四月、鈴木氏らは由緒ある桐家の名跡復興をはかり、かつて帝劇女優として名声のあつた森律子、村田嘉久子及び小田原の加藤澄代の三人に桐大内蔵、桐長桐、桐尾上の名称をおくつて四月一日松原神社において襲名式を行い、同十八日箱根観光会館で披露公演を開催した。

昭和三十一年四月十八日、記念公演の当日、箱根観光会館の正面には、桐大内蔵、桐長桐、桐尾上の三人のやぐらが掲げられ、両側には東京の各劇場、劇団、新聞社、放送局から贈られた花輪が飾られて市民の目を見張らせた。プログラムは、主催者、神奈川県文化財協会会長古宇田実、桐家名跡保存会会長鈴木十郎、祝辞は文学博士河竹繁敏、松竹株式会社大谷竹次郎の諸氏であった。
あいさつが終わって、木村錦花作詞、杵屋六左衛門作曲、藤間勘十郎振付の長唄「那須の与一扇の的」が披露され、続いて「北州千歳図」―梅の栄―「傀儡師」が演ぜられた。何から何まで一流の顔ぞろい、まことに華々しい記念公演であった。



桐家再興記念公演「那須与一扇の的」

(昭和31年、箱根観光会館)

『特別展 小田原と歌舞伎展—元小田原市長 鈴木十郎コレクションを中心に—』パンフレットより



桐尾上(加藤澄代) 桐長桐(村田嘉久子) 桐大内蔵(森律子)

『特別展 小田原と歌舞伎展—元小田原市長 鈴木十郎コレクションを中心に—』パンフレットより

■昭和37年1月19日市議会議事録(抜粋) 協議事項…市民会館の施設及び備品について

議員 (前略) 小田原での舞台芸術では、長い間の伝統があるところの桐座というものを、それをここに表わすことができたかと思つて、桐座のことについてはお考えなつて

市長 その点は私も非常に広く要望されていることであるから、市民会館というか、公会堂というか、市民会館でいく方がいいと思つているが、小田原の市民会館というものを古いものをやる場合に別名桐座ということ、歌舞伎をやる場合は桐座なんだということ、桐座の名前を復興したらどうかという考えを持っている。それで皆さんの考えておられることが、ある程度実現するのではないかと

議員 ついでにそのときに、桐座の連中がいるのだが、それについても考えたかどうかと思

■昭和41年・松竹大歌舞伎小田原公演 パンフレット「桐座座名復興について」より

(昭和41年6月9日・10日公演)

此度、尾上梅幸丈、市村羽左衛門丈を主軸とする松竹大歌舞伎を小田原市民会館に迎え、九日・十日の両日公演することができましたことはまことに喜ばしいことであり

す。今回の公演を桐座座名復興記念公演と銘打ちましたについて申しあげたいと思つます。そもそも桐座という座名は、小田原には極めて由緒ある櫓でありまして、遠く江戸時代の初期から小田原の寺町にあつて、当初から多くの名優を迎え特別な格式をもつ劇場として知られておりました。

この桐座のもとを尋ねて参りますと、北条氏の時代、大永三年(一五二三)小田原に移住し、舞太夫職に任ぜられた大橋家を祖とし、以来桐家と称し代々舞太夫をつとめてきた伝統のある家柄でありました。

その桐家が江戸時代の初期に桐座を作つたのでありました。関東十八座の一つとして挙げられ、江戸歌舞伎との関連においては、市村座の控え櫓となつたこともあるというよう

な、江戸歌舞伎史上にもいろいろつながりの深いものがあつたのであります。
先年、その桐家の名跡を復興するため、近代女優の第一人者といわれた森律子さんらに桐大内蔵その他桐家に由緒ある名跡を継承して貰つたのであります。ところで劇場としての桐座は、大正の頃まで辛じて存続しておりましたがその後廃座となつてしまつておりますので、小田原にとり由緒あるこの座名を永く保存し、後世に伝える意味に於いて、今回の松竹大歌舞伎の公演を機として座名を再

興したものであります。今後、古典芸術等を上演する場合は、桐座の座名を以て公演いたしたいと考えた次第であります。



桐尾上着用の冠台座

『特別展 小田原と歌舞伎展—元小田原市長 鈴木十郎コレクションを中心に—』パンフレットより

尾上梅幸芸術院賞受賞
祝座名跡再興記念興行・尾上梅幸創立
松竹大歌舞伎公演
6.9.10 於・小田原市民会館

前夜	6月9日	10時(全席)	1,500円
		7時(全席)	1,000円
		4時(全席)	800円
		1時(全席)	500円
当日	6月10日	10時(全席)	1,500円
		7時(全席)	1,000円
		4時(全席)	800円
		1時(全席)	500円

歌舞伎展覧会

おだわらライブラリー通信 第五号

- 発行 小田原市 文化部文化政策課
- 平成27年度文化創造活動担い手育成事業「文化資源発掘ワークショップ」報告書
- 編集 富士原 直也(文化政策課)
- 資料提供
荒河純さん(小田原史談会)
北村敏弘さん
杉崎宗雲さん
- 印刷 平成28年3月吉日
- 問合せ 0465-33-1709
〒250-8555 小田原市荻窪300番地
文化政策課 芸術文化創造係
電話 0465-33-1706 / FAX 0465-33-1526